ALCE例会　日本語教師の専門性を考える

日本語教師としての「存在論的接近」

2021年11月13日

小畑美奈恵

そもそも我々は
主体性や自律性を
おざなりにしてきたのでは？

どうして
我々は主体性や自律性を
おざなりにしてきたのか？

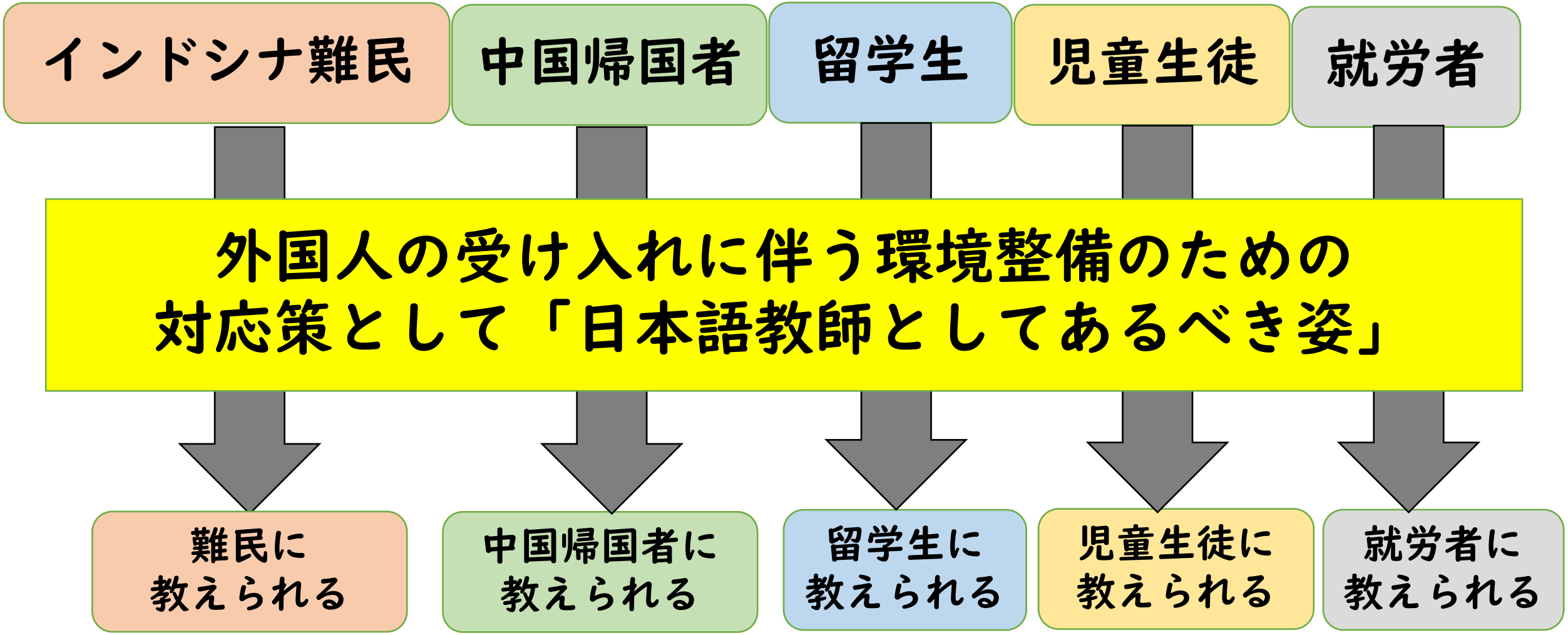
日本語教師の「専門性」の議論

文化庁文化審議会国語分科会（2018，2019）
「役割・段階・活動分野ごとの日本語教育人材に求められる資質・能力」

生活者　留学生　児童生徒　就労者

難民　海外

日本語教師の「専門性」の議論



日本語教師の「専門性」の議論

留学生に
教えられる

中国帰国者に
教えられる

児童生徒に
教えられる

難民に
教えられる

就労者に
教えられる

日本語教師の「専門性」の議論

次はどんな人が来る？

私は何をしたらいいの？

「〇〇に教えられる
ようになる」
一体いくつ必要？

留学生に
教えられ

この仕事、誰がやって
もいいのでは？
私である必要ある？

目の前の学習者だけ
をみて「教える」
ことに専念するだけ
でいいの？？？

私が日本語を教えた先に
どんな未来・社会がある
の？

日本語教師の「専門性」と主体性・自律性

- 規範や制度に搦めとられる

  常に、待ち・受け身の体勢になる

- 社会的なビジョンの欠落

  自分が行う日本語教育という営みが何につながるのか
  について考える機会がない

日本語教師自身の主体性や自律性がおざなりになる

ここで
教育学における専門性
の議論を参考に

教育学における教師の「専門性」の議論

教育のサービス化👉規範／制度に従う

なぜあなたは
教師なのか？

「こうあるべき」に従って
いくのね、、しょうがない

えっ、あなたは
どうなのかって？
そんなこと言われても

教育実践において「子どもや文化や社会との対峙を迫られ、自らの存在の意味を問われ続け」（佐藤1997：5）る。

教育学における教師の「専門性」の議論

教育のサービス化👉規範／制度に従う

なぜあなたは
教師なのか？

「こうあるべき」に従って
いくのね、、しょうがない

えっ、あなたは
どうなのかって？
そんなこと言われても

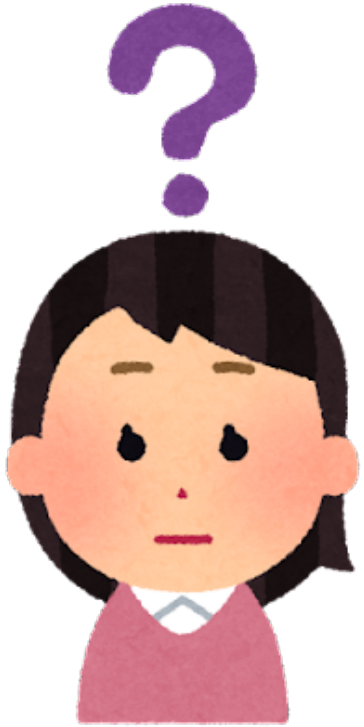
教師の主体性や自律性はどこに・・・
👉教師は「虚ろさ」「絶望」を感じる

教師の主体性や自律性を取り戻すために

自分自身が教師であることを問う「存在論的接近」（佐藤1997）

教師って何をすれば
いいの？

私が教師であること
はどういうこと？



教師である私が
大事にしたいことって
何？

なんで私は
教師なんだっけ？

ここで
日本語教師に話を戻すと

日本語教師の主体性や自律性を取り戻すために

自分自身が教師であることを問う「存在論的接近」（佐藤1997）

日本語教師って
何をすればいいの？

私が目の前の学習者に日本語
を教えること
＝どういうことにつながる？

日本語教師である私が
大事にしたいことって
何？

なんで私は日本語教師
なんだっけ？

＝省察

日本語教師としての「存在論的接近」

自分自身が教師であることを問う「存在論的接近」（佐藤1997）
＝「私は日本語教師として何をすべきか・どうあるべきか」

私はこんな
日本語教師でありたい

私が行なう
日本語教育とはこういうこと！

日本語教師が日本語教師としてのアイデンティティを
主体的・自律的に構成する

日本語教師の専門性と省察

省察とは

- 『経験と教育』（ジョン・デューイ2004/1938）
- 「省察的実践家」（ドナルド・ショーン2007/1983）
- 「ALACTモデル」（コルトハーヘン・F 2010/2001）
- 「反省的実践家」としての教師（佐藤学1997）

日本語教師の専門性と省察

省察の重要性

- 「自己研修型教師」「内省的実践家」（岡崎・岡崎1997）
- 「アクション・リサーチ」（横溝2000）
- 「実践＝研究」（三代他2014）

省察を促すための場づくり

- 「学びを培うコミュニティ研究会」（池田・朱2017）
- 「実践持ち寄り会」（文野2014）
- 「ティーチング・ポートフォリオ研究会」（栗田2018）

個別的・動態的専門性観にもとづく
主体的・自律的日本語教師
をめざすには
↓

日本語教師としての「存在論的接近」
にもとづく日本語教師の「専門性」の議論

参考文献

池田広子・朱桂栄（2017）『実践のふり返りによる日本語教師教育―成人学習論の視点から』鳳書房

岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習―理論と実践』アルク

栗田佳代子・吉田塁・大野智久（編）(2018)『教師のための「なりたい教師」になれる本！―TPチャートでクラスも授業改善もうまくいく！』学陽書房

コルトハーヘン，F.（編著）（2010）『教師教育学―理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』（武田信子監訳、今泉友里・鈴木悠太・山辺恵理子訳）学文社　（Korthagen, F. A. (Ed.) (2001) Linking Practiceand Theory: The Pedagogy of Realistic Teacher Education. London:Routledge.）

佐藤学（1997）『教師というアポリア―反省的実践へ』世織書房

ショーン，ドナルド A.（2007）『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考』（柳沢昌一・三輪健二監訳）鳳書房（Schön, D.(1983) The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action.New York: Basic Books.）

デューイ，ジョン（2004）『経験と教育』（市村尚久訳）講談社（Dewey, J.(1938) Experience and Education. New York: The Macmillan Company.）

文化庁文化審議会国語分科会（2019）「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/r1393555_03.pdf（2021年11月12日参照）

文野峯子（2014）「実践持ち寄り会で共有されるもの・こと」『イマ×ココ』2, pp.13–18.　ココ出版

三代純平・古屋憲章・古賀和恵・武一美・寅丸真澄・長嶺倫子（2014）「新しいパラダイムとしての実践研究―Action Researchの再解釈」細川英雄・三代純平（編）『実践研究は何をめざすか―日本語教育における実践研究の意味と可能性』pp.49–90.　ココ出版

横溝紳一郎（2000）『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社